

ブツダの母 摩耶夫人に学ぶこれからの子育て

益 田 晴 代

「親学」会の起り

現代がかかえる重要な課題として、子どもや孫が会うことになる未来社会は、人口頭脳やIT、ロボットが活躍することになりますから、多様な価値観を保持し直面する物ごとへの、柔軟な対応のできる人が求められると考えます。そのような人を育てるためには、「心と体のバランス」を生命の発発から親が我が子に関わることが大切な事であると、現代の「産科学」・「心理学」・「発達生理学」・「脳科学」でも伝えています。

私は、我が子四人を育てた経過の中で、一番必要と考え悩んだことは「子育ての学び」を知らなかった事でした。「子育てとは何か」「何が一番大切か」「我が子の幸せとは何か」「子どもが求めているのは何か」。その後より良い子育てのための「親の学びの場」として親学会を開くことになり、母のモデルとして『偉大な釈尊』を育てた母摩耶夫人の人となりを求めて、二十数年前インド・ネパールの第一回の旅へと出発したのでした。

ブツダの母 摩耶夫人に学ぶこれからの子育て (益田)

釈尊の父浄飯王と母摩耶夫人

釈迦族の王、浄飯王は多くの人々から尊敬され、信頼されてきました。諸国の族長たちからの信任も厚く、武術にすぐれ、文化教育経済に精通し、常に民の幸福を願う国を治めたので、その名声は広く伝わり、「諸国一の釈迦族」と呼ばれていました。

わが子釈尊を、この上ない深い愛で包み育てられたのですが、釈尊は思春期を過ぎる頃からもの思いにふけるようになり、出家をこころざすようになりました。浄飯王が釈尊の心を思いとどませるため、カピラ城内に「春夏秋冬」の宮殿を造ったことは有名です。

浄飯王は釈尊成道後は釈迦教団随一の支援者として、家臣五百名の入信を進め、教団発展の協力を最後までつづけたと伝えていきます。カピラ城と浄飯王夫妻の墓所の中に、孫ラゴラ尊者の得度式の御堂が現存します。美しい飾りほどこした素晴らしい大理石で造られていて、当時の見事さが偲ばれる御堂で、祖父、浄飯王のラゴラ尊者への慈しみの想いが胸を打ちます。

摩耶夫人の生家であるコーリヤ族は当時近隣諸国随一裕福な王族でした。摩耶夫人は、妹のパテイ夫人と共に教育熱心な父王の考えを受け、国の内外から著名な学者を宮殿に招き、女性として最高の学識を与えられて育てられました。

成人した王女は、容姿の美しさと身に備えた豊かな教養からあふれる品性を保ち、そばに近づくと身体から良い香がし、人々はうっとりとしたといいます。王女の噂は諸国に伝わり「我れこそ」と求婚者が殺到し、すさまじい争奪

戦に至ったそうです。その様子に心を痛めた王女は、「私さえ居なくなれば」と、或る夜一人宮殿を抜け出し領地内のダフネ山に身を隠したといわれます。

私はインド・ネパールの旅を始めてから十年の歳月を経て、ダフネ山にたどりつき、初めての外国人として摩耶夫人の修行場の瞑想台にたどりつきました。遠路日本を發ち、ダフネ山の峠の頂きに差しかけたときの、興奮と戦慄は今も鮮明に覚えています。

現地の人々は、ダフネ山がかつて王女が修行した場所とは知らず、母なる森と昔から呼んでいたといいます。今も樹木が一年を通して青々と繁り、折々の季節に美味しい果実を実らせ、二千五百年前のダフネ山の豊かさが目に映る思いです。

今も虎に出合うといいますが、当時は如何ばかりかと想像すると、九ヶ月の祈りの満願を成就した王女の純粋な信仰心に深い感銘を覚えます。王女が月夜に祈りを捧げた瞑想台は、大変大きな石であつて今は三つに割れており、夜になると、時折金色の光を放つといわれています。

瞑想台近くに王女が休んだと伝えられる六帖ほどの石の側面は、花崗岩化されて小さな無数の花々が咲いておりました。良い香りがするため、その花を摘んでお線香にするといいます。

瞑想台より少し登った山の頂付近に、人間の背丈の倍ぐらいの三角形の小山がありました。その小山は二千五百年前に王女が切り捨てた長い髪の毛の化石だといわれています。突然に摩耶夫人本人に出会えたような瞬間でした。

私が瞑想台での祈っていた時、えも知れぬ香りがあたりに立ち込めました。かつて嗅いだことのない爽やかな美しい匂いでした。庵主に「いつも薫るのですか」と尋ねると「いいえ、今初めてです。神さまの香りです」と答えられ

ブツダの母 摩耶夫人に学ぶこれからの子育て (益田)

驚いたものです。そして突然、思い出したのです。

永年インド、ネパールで摩耶夫人の取材に何も情報をつかむことができず、今回で止めようと出かけたときに出合ったのが、釈迦族末裔のサキヤ氏でした。サキヤ氏から、摩耶夫人はネパールのデフダハのコーリヤ族の王女だったこと、釈尊には産みの母と育ての母の二人が居たこと、釈迦族の伝記によると、摩耶夫人は女性で有り乍ら、当時修行者だったことを教えて頂きました。

そして、うら若き乙女の身でこの深山(当時)で只一人九ヶ月の修行を成就したのはそのようなお方だからであり、偉大な釈尊をこの世に誕生させる使命ある尊いお方だったことを知ったのです。

王女は、王宮に帰り浄飯王と結婚の後、釈迦族の王宮カピラ城で生活をされたのですが、伝記によると朝は決まった時間に起床して自身の身のまわりを整えると、料理の献立、来客へのおもてなし等々、使用人に加わり箒を持って王宮のまわりまで掃除したといえます。

生活は簡素で華美を好まず、常にまわりの人々の幸福を願っていたそうです。永い間、子供に恵まれなかったのでカピラ城内にある、菩提樹の御堂に夫妻で子授けの日参を進められ、お参りの前には必ず御堂のとなりの蓮池に沐浴をされていました。この御堂と蓮池は今も現存します。

御堂の菩提樹は二千五百年前から現代にいたるまでも立派に成長し、幹の回りは大人数人が手をつないでやっとつながるほどの大変な太さになっています。

現在はネパールの遠方からも、子授けを願って参拝者が多く、子供に恵まれた人々がお札に供えた白象が沢山並んでいます。となりの蓮池は、だいぶ池の水が少なくなったと言いますが、池の周囲はたくさんの樹木や草花が一年を

通して茂っています。

わが子が無事に生まれて来るように、ひたすらに願いをもって、供徳を人々にほこした。その一つに国中の罪人を恩赦したと伝えられています。

はじめて、ルンビニーの花園にたどりついたとき、二千五百年前の四月八日釈尊誕生の情景が浮かんで来たものです。

出産の折、摩耶夫人は馬車でカピラ城を出発したと考えられますが、四月のネパールは日本の盛夏に等しく、臨月の身体にはとても困難な道中だったのでなかっただけでしょうか。実家のデブダハへは、カピラ城からの道のりがいまだ残されています。

かくして小鳥たちはさええずり、ヒマラヤの山々は美しくそびえ、色とりどりの花々の中に釈尊は誕生されたのでした。

釈尊を辿る旅

仏伝に登場するコーリヤ族領地内の遺跡群は、現在もそちこちに点在しています。コーリヤ族の王宮跡発見の知らせを受けて現地入りすること数回、毎度領地内の「ここです」と案内されるが、今だ確証に至っていません。ポール一本の広大な平野だったり、くちかけたポロポロの小屋だったりルンビニーの摩耶堂にうりふたつの御堂だったり、現地の人々は「此処に間違いない」と色々な資料を持って説明するのですが、日本へ戻って少し経つと今回も「はっきりしない」との返事がかかりしたものです。

ブッダの母 摩耶夫人に学ぶこれからの子育て (益田)

ブツダの母摩耶夫人に学ぶこれからの子育て（益田）

しかし、いずれも此処の眺望は素晴らしく、ヒマラヤの南麓に位置するため一年中温暖で、樹木はしげり、みずみずしい緑をなした草原には花が咲き乱れていました。出会う女性は美しく、摩耶夫人を偲ぶことしきりでした。

釈尊の誕生地ルンビニーよりデブダハへ向かって四十分位進んだ処に広い大きな道と出合います。バス、トラック、乗用車、とぎれることなく、行帰する交通のはげしさは大会そのものです。この道はローマに続く幹線道路だそうで、目の前に山が有るヒマラヤの南裾野だといっています。

その山は、深緑と茶色を合わせたような色をしていました。道路の路肩は、いつの時代の樹であろうか、大きな樹木がそびえ立ち、直線の道は果てしなく続き、しばらくすると一つの橋が現れたのです。ロヒニー河でした。

ロヒニー河は釈迦族とコーリヤ族のそれぞれの領地の境界線です。その為に永い間、水の権利をめぐる壮絶に争い、血を見るまで斗ったといっています。この争いは釈尊も仲裁に入ったと伝えられており、今もそのままの姿をとどめ、川の水が静かに流れています。

ルンビニーの参拝を終えると、デフダバに向かう途中にラーマグラマーがあります。釈尊の御入滅後ダビにふされたお舍利は、近隣諸国の王侯貴族が厳選して八つに分けられたのですが、ラーマグラマーだけは二千五百年前のまま現存されています。

ラーマグラマーは実母摩耶夫人のコーリヤ族に与えられた御舍利で、ここにまつわる物語は沢山残されています。仏塔にはいつも、いろいろな花々が供えていて、その花を鼻に抱えて供える象の物語、盗掘しようと盗人が現れると必ずとなりに位置している「龍神池」から物凄い暴風雨が起きてラーマグラマーに近づくことができなかつた話等々、さまざま、ラーマグラマーを現在まで守られた話を聞きました。

現地に立つと不思議な空気が立ち込めています。いつもどんよりと空は薄暗く、今にも雨が降って来そうな様子でした。現存する釈尊の御眞骨との想いからか幾度訪れても去り難く、釈尊に直接対話ができるどころです。

ラーマグラマの龍神池を喜んで対面して「碑文塚」が立っています。伝えるところによると、現代に入り日蓮宗一仏子の会松本光華氏による日蓮聖人碑文塚だそうで、この地はかつてマンゴ畑だったのですが、「仏子の会」の永年の熱意によって購入し、念願の建立ができたといわれます。

二千五百年前に仏教を起こし人類が幸福になるためへの道標を示された釈尊。同じく「国の平和」「人々の幸福」を願ひ、釈尊が極められた法華経を基に、立正安国論を宣言され、示された日蓮聖人と師弟のお二人が時を経て「龍神池」を喜んで向い合う風景は訪れる人々の胸を打ちます。

日蓮聖人の釈尊への敬慕の心は多くの書物によって現代に伝えられています。その「志」を現在の弟子の方々の熱意によって実現している処です。宗門の方々の信仰の深さをものごたり、どのような変化の時代があっても、変わらない次代へと引き継がれることを確認できる場所です。

摩耶夫人の妹パティ夫人（波堤比丘尼）

当時の風習で、摩耶夫人と一緒に浄飯王に嫁ぎ、姉より先に女の子を出産したパティ夫人。釈尊の誕生後、彼女はすぐ教団随一美男とうたわれたナンダ尊者を出産されました。パティ夫人は非常に人格的に勝っていて、心温かい女性で有ることを伺わせる沢山の事柄が伝えられています。浄飯王は摩耶夫人亡きあとの生涯を、パティ夫人一人だけ愛されたと伝えられています。

ブツダの母摩耶夫人に学ぶこれからの子育て（益田）

パティ夫人は愛と献身を持って浄飯王と共に過ごし、浄飯王亡きあと、再三再四、尼僧の釈迦教団への入団の許可を釈尊に願ったそうです。義母の本気の心を知り、阿南尊者の熱心な取りなしもあって、尼僧教団最初の尼僧として入団を許されたのです。

それからのパティ夫人の活躍の素晴らしさは現代に伝わっており、当時の尼僧たちの伝記（中村大訳）詩集によって知ることが出来ます。誕生の七日で母を失った釈尊の身の上をとでも哀しみ、わが子ナンダ尊者へは乳母のお乳を与え釈尊へは自身のお乳を与えられました。二人を両手に抱き沐浴をし、丁寧に上質な油を身体に塗り頼ずりして話しかけ、おむつをかえたそうです。

この釈尊への温かい関わりの様子が、人々に伝わり母を失くした不幸な釈尊が新たな素晴らしい母を得た幸福を喜びあったといえます。パティ夫人の、釈尊を愛し慈しむ日々の関わりは、釈尊の人間形成の基礎となる重要な子育てであったと考えます。特に乳幼児期から密着の母子関係が子どもの発達段階に必要な自己肯定観の確立をさせるといふ、パティ夫人はそれを実践したのです。

ここで、釈尊とパティ夫人の密なる母子関係を物語る次の伝記を紹介させていただきます。カピラ城を出て修行中の数年間パティ夫人の釈尊を気遣う日々は、祈りのすべてであった筈です。今日はどうしているか、体は大丈夫か、どこにどうしているのか、不安と心配で毎日を過ごしたことでしょう。そんな月日の時が流れて、釈尊の成道の知らせがカピラ城に届いたときの、パティ夫人の喜びは如何ばかりだったか。

現在の交通手段でインドのブツダガヤへ、ネパールのルンビニーから出発したら、車で走り途中で飛行機に乗り換え、又車を使うという果てしない時間がかかります。飛んで行きたい思いを押さえて時を待ったことでしょう。あ

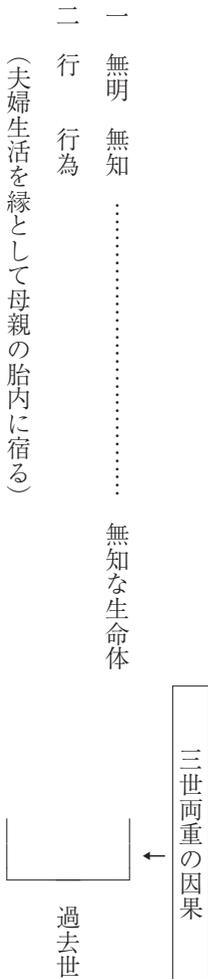
るとき馬車で行ける距離に布教のため釈尊が来たことを知り、飛ぶように出発をして、久しぶりの母子の対面を果たしたのでした。

パティ夫人は百二十歳まで生きて釈尊を見守ったといっています。夫人の深い慈しみの愛の子育てによって、釈尊の慈悲深い思いやりの心を育みました。仏教を起こした類まれな叡智は、摩耶夫人の女性の身でありながら一人山奥で瞑想を実行し天の啓示を受けられる高い精神性のDNAの遺伝であったことを深く確認したのでした。

これからの子育て

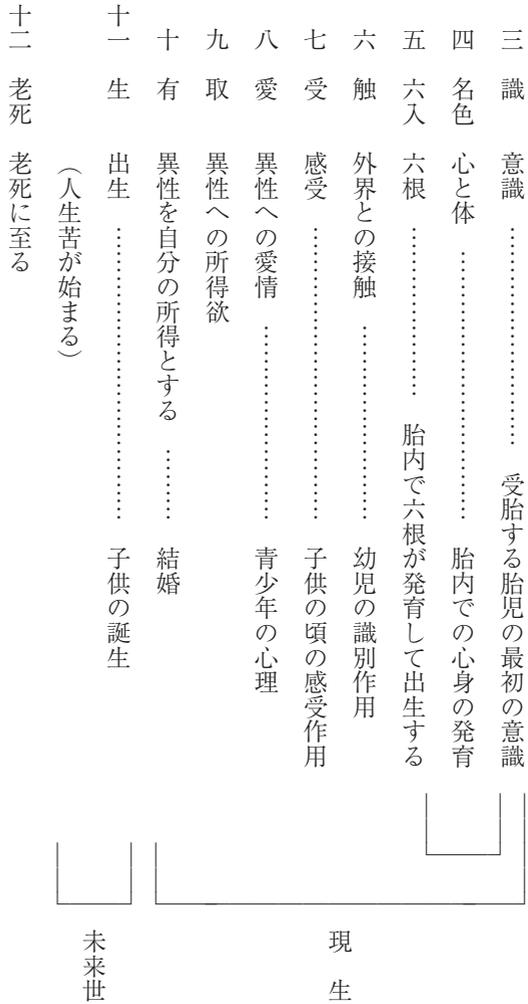
十二因縁の教え

十二の段階の五までが胎内から始められるとの重要性を指しているこのことをふまえて、現代の子育てを考えてみたいと思います。



ブツダの母摩耶夫人に学ぶこれからの子育て (益田)

ブツダの母摩耶夫人に学ぶこれからの子育て（益田）



十二因縁の法門を図式が示すように、人間の生命は母の胎内の受胎の瞬間からすでに意識があるとされています。

四名色 心と体 …… 胎内での心身の発育

五 六入 六根 …… 胎内で六根が発育して出生する

眼耳鼻舌身意（六根）

新生児の誕生は十二の段階の五番目の「六入」で出生すると示されており、すでに胎児は、生命の始まりから意識があるとしたら、この胎内の生活を深く親は知るべきではないかと思えます。

私は、今まで子どもが生まれることに対して深く考えることはありませんでした。妊娠に気づくと喜び、不安になったりを繰り返しながら出産の日を待つ。これを当たり前のこととして過ごしたのですが、四人の子どもを出産して、ひとりひとりが必ずしも同じ状態でなく、様々な妊娠の胎児期を過ごし、思いがけないハプニングと出会ったことによつて、何故もつと妊娠とは一体どういうことなのか、母親としてどのような心構えを持つことなのか等々、心の面での自身の無知を知ることになったのです。

生まれてくるわが子が、どんな胎児期を過ごしたのかを、四人も産み乍ら考えもしなかった自分のおろかさに気づいたのでした。どうしたらこの子が幸せに元気で生涯を過ごすことができるのか、その答えが、十二因縁の無明から出発することだと、そのことを知らずに子育てをしたことに気づいたのでした。

結婚後、長い間子どもに恵まれなかった釈尊の両親浄飯王と摩耶夫人は、カピラ城内の菩提樹の小さな御堂に、毎日授けの祈願をされました。摩耶夫人は必ず御堂のそばの蓮池に沐浴をしてから参拝をしたそうです。

その甲斐あつて或夜、美しい白象が天より摩耶夫人めがけ降りて来る夢を見た後、受胎に気づきました。この時の

ブツダの母摩耶夫人に学ぶこれからの子育て（益田）

ブツダの母 摩耶夫人に学ぶこれからの子育て (益田)

夫妻の喜びは測り知ることのできないほどだったと思います。

いつも体を清め規則正しく保ち、時間の許す限り居間や外まわりを清潔に心がけ、胎内の我が子のために良いことを出来る限りすすめられたと考えます。我が子が元気で無事に生まれてほしい、その祈りを捧げつづけることの十ヵ月であった筈です。白象は神であるのでその祈りこそ、ダフネ山での九ヶ月の満願の日の天よりの啓示「結婚して良い子を産んで世のため、人のために貢献をなさい」であったからです。

胎内記憶から始まる人類の願い

池川明氏は永年の産科医として、臨床の関わりから子どもたちの「胎内記憶」に気づくことになり、現在世界から注目をされている先生です。子どもたちは三、四才位まで胎内記憶を語るといいます。この世に生まれて来ることに成ったきっかけは、ほとんどの子どもの共通点が母親を、助けるために生まれて来たのだということです。空の上から自分の母になる人を見つけ、これから地球に生まれる大勢の子どもたちと一緒に順番待ちをして生まれて来ると。

池川氏（親学会会員）からその話を聞いたときは大変驚きました。世界最古「アジア文化史」の中に釈尊誕生の場面にまさしく同じようなことが書かれており、釈尊がこの世に生まれるとき、空の上から母を探し、「摩耶夫人を選ぶ理由として摩耶夫人の祖父は大変に人望厚く大勢の人々を助けたのでその人の孫の摩耶夫人に決めた」このような記述があったのです。

この世の生まれる命の神秘は、現代の産科医の池川氏の臨床活動を通して証明されております。

心と体のバランス

それぞれの年齢に応じた関わり方が鍵

	人間形成	
体の関り		心の関り
妊娠出産の不安や衛生管理を、産科病院で教育してくれる。	胎児期	成人の脳の五分の三までがこの時期に発達する。白紙に、何を親は植え込むか
出産後は、病院及び保健所が母子の健康維持に関する	乳幼児期	「知・情・意」を育む情感は、この時期に愛のコミュニケーションによって植え込むのが良い
学校教育、集団生活保険医の指導。食事のバランス。規則正しい生活。運動による身体作り	児童期 少年期	子供の年齢に応じた視点でふれていく。物質的なものよりも貢献心・向上心を育てる事に最も相応しい時期である。
医療保険制度の充実。病院の選択の自由。情報による自己の健康管理の徹底	思春期 青年期	この時期はバラ色の世界。全ては自分の為に存在していると思いつく。伸びる力、躍動する心を認めてあげる。対話の中から答えを見つけていく大切さを。
生活習慣から病気になることや、ストレスの消化など肉体が発達・老化する仕組みでも判るよ うに、社会教育が来てきた。	壮年期 高齢期	年齢に達しなければ解らなかつた事を確認しつつ、一生懸命に生きた自己を認め、他に感謝する、それが豊かな高齢期を迎える事になる。

ブッダの母摩耶夫人に学ぶこれからの子育て (益田)

未来は子どもの育て方で決まる

人はみな体と心を持っているのですが、ともすると目に見える体だけを中心に考えて毎日を送ってしまっています。かつて私もそのような子育てをした親の一人ですが、四人目の子どもの受胎直前に『母親教室』で胎児のときからすでに意志のあることを教えられて、「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」を読み上げ、十ヶ月の胎教で出産した四女が、ピンク色の肌と金色の産毛を持って産まれたことから、親の学びの場の重要性に気づき、世の親になる人たちのために親学会を起こすことになったのです。

米国の作家アルビン・トフラー氏はかつて「第三の波」シリーズで世界に衝撃的な文学を発表した有名な作家です。氏は「人類の消滅は「核」ではなく家庭の崩壊」と述べています。

当時の世界は、今と同じように「核」戦争の驚異に不安になっていたので、その言葉の重要性をあまり受取らなかつたのですが、約三十年を経た現代社会はこの言葉を、改めて深く考える時代を迎えました。

個の確立が進んできた現代社会に家庭とは何か、家族とは何かの問いを、答えを求めてすすめることの大切さを考えます。人間とは人と人との関わりのみで、生まれて来て、永い一生を人と人との関わりから始まり、生涯がすすめられます。そのことの重要な学びをすすめるのが家族であり、家庭です。子どもの人間形成は、家庭が出发点と考えることの大切さを私たちは、今改めて考えてみたいのです。

これからの子育てに関わる人々、両親・保育関係・教師の諸氏の皆さんに伝えたいことは、「どのような人に成長して欲しいか」との目的を持って関わるのが重要であるということです。今、関わっているこの子の未来が、「幸福な

未来」であるように、その「幸福な未来」を創るのは、その子自身の力であることを心にとどめて、すすめることと考えます。

私たちが一番望むことは、心優しく思いやりがあつて自分を理解してくれる人。そのような人が廻りに大勢居て欲しいと願っているのではないでしょうか。その実現はそれを願うその人自身がわが子、わが家族から実践を迷わずに勧めることです。

人間とは自分自身が体感した、喜びやしあわせを受けて初めて感情が発動し感覚が記憶されます。受けた喜びの幸せだった心を、他者に与え、大切なことを教えるのが、廻りの大人たちの役割です。生命の始まりから愛をそそぐことが大切だと云うことはこのことを指しています。摩耶夫人・パティ夫人は、このことを、わが子に伝えられたことによつて愛深き積尊が育つたのです。

二千五百年を経て「これからの子育て」に、積尊を育てた摩耶夫人・パティ夫人の子育を参考にされることを、切に願う未来の地球の人たちの平和と幸福を願います。

合掌